

17-7 授業解題

島名：グローバル・ヒストリー

教科（領域）：国語

単元（教材）：「ちいちゃんのかげおくり」

対象：小学校三年生

授業者：井上美鈴

1. グローバル・スタディーズの観点からみた本授業の「強み」

○実体験としてはもちろん、感覚としてもまだ戦争のイメージがない児童生徒に、どのように当時の時代状況にアプローチさせるか。グローバル・ヒストリーの大枠の企図では、実際に「さわれる」物を積極的に用いることで、グローバル化という現象を頭だけでなく感覚として理解することがねらいの一つとなっている。本授業の特色は、そうした企図を良い意味で超えて、国語の授業であることを積極的に活かしたところにある。具体的には以下の点が挙げられる。

○等身大の視点：児童生徒にも共感しやすい、自分たちと同年代の児童（ちいちゃん）の日常的な視点に立つことで、戦争という、子供はもちろん、親の世代でも知らない事象に、より効果的にアプローチすることができたように思われる。

○作品の世界観を議論するにあたって、自分たちが普段用いている身近な言葉が、戦争文学のなかの様々な非日常的な事象や単語と結びつき、戦争に対するイメージが子供たちの中で徐々に作り上げられていくのが見て取れた。

○戦争という実感としての馴染みが薄い問題に、「日常の視点」や身近な言葉の「語感」を通じて感覚的に接近するという方法は、「さわれる」歴史の当初の枠組みを超える可能性を示しているように思われる。

○また本授業の事前に「世界一美しいぼくの村」を教材に、日本の戦争文学だけでなく他地域の戦争体験について読み聞かせを行ったことも、子どもたちに複眼的な視座を設けるうえで効果的だった。

2. グローバル・スタディーズのカリキュラム開発にむけて

○以下の点について、グローバル化という文脈における歴史的な前提として、補足しておきたい。ただし発達段階を勘案して、授業者の側のみが踏まえておけば良いと思われる。

○本授業の教材で扱われたアジア太平洋戦争は、グローバル化の歴史の負の側面として位置づけることができる。15世紀末に大航海時代の幕開けとともに本格化したグローバル化は、19世紀には蒸気機関の普及によって一気に加速した。この過程を牽引した欧米列強に、やがて日本をはじめとする後発諸国が追いつき追い越そうとするなかで様々な衝突が生まれる。そのピークの一つが第二次世界大戦（アジア太平洋戦争）である。